

第9回学生とシニアの対話 in 八戸（平成 25 年度）報告書

平成 26 年 2 月 20 日 針山日出夫



【概要】

今年で 9 回目となる八戸工業大学での学生たちとの対話会が平成 26 年 1 月 29 日(水)に開催された。今回の企画は八戸工大における 4 年間に亘る一連の原子力関連カリキュラムの一環として同学 3 年生を対象とする「原子力体感研修（原子力関連施設の見学など）」の纏めとして実施されたもの。参加学生は 27 名、参加教官 3 名、参加シニアは 10 名であった。学生たちはエネルギーと原子力の意義について日頃の思いや疑問を伸び伸びと語り、活気溢れる実り多き対話会であった。なお、来年度も同様の企画で実施する予定とのことである。

参加教官：佐藤学教授、唐沢英年教授、斎藤克治主事（社会連携学術推進）

参加シニア：小川博巳、菊池新喜、岸昭正、工藤昭雄、栗野量一郎、高橋謙治、西郷正雄、
坪谷隆夫、三谷信次、針山日出夫 計 10 名

1. 対話会全体プログラム

日時：平成 26 年 1 月 29 日(水)10:00-17:00(午前中は学生のみ)

場所：八戸工業大学メディアセンター

<学生だけによるグループディスカッション：(10:00-12:00)>

テーマ： 「安全安心と原子力(原子力を使っていくには何が必要か)」

参加学科： 機械情報技術学科、電気電子システム学科、バイオ環境工学科

<昼食懇親：(12:00-13:00)>

1.シニア集合(メディアセンター)

2. 昼食会 & 事前懇談(対話 Gr 別に学生を交えた会食、八戸せんべい汁ほか)

<学生とシニアとの対話：(13:00-17:00)>

1. 開会挨拶(佐藤学教授、菊池・SNW 東北代表幹事)、参加シニアの紹介

2. 基調講演(講師：小川・SNW 会長代行)

演題「えんぶりと原子力：諸君への期待」①福島/女川に何を学ぶか ②日本の電力供給は大丈夫か ③グローバルなエネルギー事情 ④学生諸君への期待

3. 対話(事前のグループディスカッションの結果を踏まえ対話)

4. グループ発表(発表テーマは「安全安心と原子力」に統一)

5. 講評(SNW 東北・高橋、SNW・三谷)並びに閉会挨拶(佐藤教授)

2. 開会挨拶(佐藤学教授、菊池 SNW 東北代表幹事)、シニアの紹介

佐藤教授より今回の対話会の位置づけと狙いについて「本学には原子力専門学科はないが今後いろんな分野に進むことを勘案して、エネルギー問題、原子力問題については4年間のカリキュラムを組んで自分の考え方を持つように指導してきている。今回は、原子力体感研修の一環として実施するので、学生たちは日頃の疑問や思いについてシニアと対話し、多くを学んで欲しい」旨の挨拶があった。

また、菊池シニアよりのこれまでの諸先生方のご尽力と今回開催に対する敬意と謝辞の表明後に参加シニアから簡単な自己紹介をした。

3. 基調講演(講師：小川 SNW 会長代行)

「えんぶりと原子力：諸君への期待」と題して、八戸名物の伝統祭事であるえんぶりと原子力の伝統/技術を架けた文化の香りのする講演がなされた。基調講演の要点は以下の通り。

- 1) 福島事故の反省と女川原子力発電所の津波に対する取組みから、リスクに対する鋭い感性と日常の努力があれば信頼に足る原子力の構築は可能である。とりわけ、女川原子力発電所の長期にわたる津波リスクに対する愚直な取組みから学ぶことは多い。
- 2) 福島事故後のエネルギー消費のトレンド、原発停止による国民経済への甚大な影響、電源別発電量などから日本のエネルギー安全保障は脆

弱。原発に対する国民の信頼回復と骨太の国家戦略構築が求められている。

- 3) 世界のエネルギー動向を見極め、青森をひとつの拠点とした原子力復興元年を目指しつつ若い諸君の今後の活躍を祈っている。

4. グループ討論の概要

今回の対話会企画では、「原子力の安全安心のためには何が必要か？」を各グループの共通テーマとして参加者全員が5グループに分かれて対話を行った。以下に各グループの対話の概要を示す。

4.1 グループ1の対話概要（報告者：小川）

参加学生：阿部（ファシリテータ）、蒔苗、蛭名、関口 シニア：菊池、小川

- 煎餅汁の昼食を共に取りながらの自己紹介と事前懇談は、緊張を一気に解きほぐして、グループ対話が極めてスムーズに開始出来た。
- ファシリテータは阿部君が自主的に手を挙げ、未経験ではあったが適切にリード。
- 学生は全員が電気電子システム学科3年生で、午前中のGr討議を踏まえ、予め

焦点を絞り込んだ学生意見と質問を基に、対話が展開された；

- ① 学生：福島事故を経験して、「原子力はリスクが高い」との認識が高まった。事故リスクはゼロになり得ぬので、一般人に向けてどの様に説明し、安心して貰うべきか？

シニア：福島事故を反省して、国は規制と基準を改定し、事業者は既に各種対策を実施中で、規制委での安全審査が進行中だ。更に総合資源エネルギー調査会・原子力小委の下に「自主的安全性向上に関するWG」を設立し、関係者が原子力特有のリスク評価とマネジメント等を検討中だ。その様な対応状況を丁寧に説明し、理解して頂けるよう努めたいものだ。また事前の備えが十分であった女川など、成功事例も併せて説明したい。

- ② 学生：一般人は原子力を怖いと感じている。どの様に安心して貰うべきか？

シニア：怖さの基は、「放射線に対する不十分な知識と過大な基準設定・不適切な避難」などが主因と思われる。学校で放射線につき、教育して来なかったことを国は反省して、義務教育の在り方を変更し、小中高校生向けの副読本、教師用解説書を出版した。[文科省のHPで全て見れる](http://www.mext.go.jp/b_menu/shuppan/sonota/attach/1313004.htm)ので、皆さんも是非勉強し、身近な人々に教えてやって貰いたい。

http://www.mext.go.jp/b_menu/shuppan/sonota/attach/1313004.htm

- ③ 学生：「原発ゼロの現状でも、何とかなっている」との意見が多い。真実は何か？

シニア：原子力の代替え火力の燃料費が、年間 3.8 兆円、年間の貿易収支は 11.5 兆円にも及ぶ過去最大の赤字だ。このまま続けば日本は間違いなく沈没する。原発の安全対策を丁寧に説明し、社会の理解と信頼を回復して、1 日も早く再稼働することが、極めて大切だ。

○ その他活発な意見交換がなされたが、概要では省略する。

4.2 グループ 2 の対話概要（報告者：三谷）

学生達は予め、新聞等の記事をもとに討議の対象を ①脱原発問題について、②原子力の必要性、③福島原発の重大な事故原因、の 3 つに絞って考え方をまとめていた。

議論は原子力の必要性から始まり以下の展開へと流れていった。

- (1) 脱原発が今巷で問題になっている。
- (2) 原子力発電の代わりに火力発電を強化した結果、多くの化石燃料を輸入せざるを得ない状況になっている。
- (3) その結果貿易収支は赤字となり、CO₂ も増え続け温暖化が進んでいる。
- (4) そのため電気料金を値上げせざるを得なくなり、国民生活を圧迫している。
- (5) 同時に製造業にも影響が出てきている。
- (6) 原発再稼働するに当たって自分たちで出来ることを考えてみた。
 - 1) 自分たちの身の回りの人達が放射線の知識を身に付ける手助けをする。
 - 2) メディアの記事に誤りを見つけたら改善を申し入れる。

感想：午前中事前討議をしていたため、対話はスムーズに進んだ。同じ学科どうしでグループを構成したのは良かったと思う。特にほとんどが野球部の仲間同士というのは忌憚なく話し合えたと思う。特に対話前のせんべい汁昼食の段階から第 2 グループは、担当シニアと会食し纏まっていたのが良かった。

4.3 グループ 3 の対話概要（報告者：坪谷）

3 班には、バイオ環境工学を専攻する 5 名の学生が配属された。いずれも学部 3 年、内女子学生 3 名であった。シニアは、工藤昭雄氏（S NW東北）と報告者である。

大学側の配慮でグループに配属された学生と「せんべい汁」を楽しみながら昼食をとり、事実上のアイスブレーキングとなった。

佐藤先生の指導でグループ対話会では、①原子力発電所のこれから、②国民が原子力発電に求めるもの、などについて学習することを午前中のグループ学習の中で整理しメモにしていた。

1. グループ対話は、14時45分から16時20分までがあてられていた。5名の学生の中から1名（中村さん）が進行役を務めた。また、OHPを用いた対話の成果発表に備えることを促した。
2. ①原子力発電所のこれからについては、原発比率を徐々に減らすことでグループの学生はまとまっていた。やはり、原子力事故からの厳しい経験をめぐることができないことが背景にある。基調講演で原発の稼働停止による巨大な貿易赤字（国富の流出）、地球温暖化問題、電気料上昇などを確認していた。徐々に減らすという意見だけでなく老朽原発の新鋭原発への建て替え、化石燃料の輸送に関わるリスク、原子力発電の国産エネルギーとしての特長などに目を向けるよう指導した。
3. ②国民が求めるものについては、信用できる安全策にまとめられていた。防潮堤や防波堤などハード面の対策を挙げていたが、原発の管理能力などソフト面の充実が特に重要性であることを指導した。自分たちを含めた国民一人ひとりについては、既に、大間、六ヶ所の見学の機会があったことを踏まえテレビ、新聞、インターネットなどで間接的に得られる情報より「本物を見る」重要性を挙げていた。自分たちは恵まれているが、ゆとり教育の見直しのため中高生など子供たちの見学の機会が減少していることを問題視していた。見学の機会が減った理由の一つとして核セキュリティの強化があることを指導した。また、佐藤先生から宇野賀津子著「低線量放射線を超えて」を読むように勧められていたが、放射線に対して正しい知識を取得することが大事だと指摘していた。
4. グループ対話の終了後10分の時間が与えられ3班の対話成果を発表した。「正しい知識を学ぶ場を増やすことが重要」との感想を述べていた。

4.4 グループ4の対話概要（報告者：西郷）

参加者：学生） 佐々木惟裕（のぶひろ）、佐々木優介、佐々木渉、佐々木和征、
下川原靖昭（やすあき）、裕尾英兒（まつおえいじ）
シニア） 粟野量一郎、西郷正雄

昼の食事を一緒にしたことにより、グループディスカッションは、和やかな雰囲気より始められ、出足がまずまずと言ったところである。最初の発表者と書記を決めるのにあたっては、自ら名乗り上げてもらったので、直ぐに対話会に臨むことができた。

まず、各自がどのようなことについて、シニアに聞きたいか、議論したいかを話してもらった。その際、誰もが原子力は必要と思うと発言したので、シニアから「何故、原子力を必要と思うのか」を各自の考えを述べてもらうために追加した。その結果、次のことについて話し合った。

- ① 原子力の必要性 ②安全対策について

議論を進めていく中で、③メディアの報道について④放射能による被ばくについてと話題は発展した。

原子力の必要性のところでは、原発が無くなればどうなるか学生に意見を聞き、その後で、シニアより経済面での影響により、産業界が海外に拠点を置くなどして空洞化し、失業者が増加するなど、計り知れない影響を受けるであろうことを説明した。また、ドイツの脱原発政策転換に関して、日本とでは、事情が異なるためにドイツのようにはいかないことなども説明した。

安全対策では、深層防護の説明を行い、新規制では、3層から5層の防護にしたこと、従い、福島事故に至ることは有り得ない安全対策が施されることになることを説明した。

報道については、必ずしもメディアは中立ではないので、いくつかの報道内容を照らして、客観的に判断することの必要性を、放射線被ばくについても、1mSv/年は、身体への影響とは全く関係なく、施設からの放射能漏れを早期検知するのが、目的で定められた法律であること。100mSv 以下では、有意な放射線影響は見当たっていないことなどを説明した。

学生たちは、原子力については、授業で少しはやっているが、頭に入り込むほどのものでないために、シニアより教えることが多くなり、対話は気楽にできたが、どうしてもシニアの説明が長くならざるを得なかった。

4.5 グループ5の対話概要（報告者：針山）

参加者：（学生）桜田、三浦、小泉、馬嶋

（シニア）高橋、針山

今回は「原子力の安全安心」が全てのグループでの共通テーマとなっていることから、参加学生全員からこのテーマに照らした日頃の問題意識や疑問点などについて意見表明してもらった。その上で、更に深く掘り下げる項目を選定し議論と対話を進めた。具体的な討論項目は以下。

- ① 安心とは何か？リスクとは何か？安心とは何か？について概念論をおさらい。原発推進のためには国民の原子力への信頼醸成が最も重要。
- ② 国民が原子力を安心して受け入れることが出来る為の情報共有の在り方について意見交換

- ③ マスメディアの原子力/エネルギー報道のあり方について討論
(マスメディアの報道は感情的、否定的。原子力の必要性を判りやすく情報提供するメディアがない。少なくとも、原子力の便益とそのリスクについて冷静な報道をすべきである。)
- ④ 原発ゼロの影響と実現性について
原発ゼロにすることでのいろいろな角度(経済、技術力、国家の威信、外交政策、エネルギー安全保障、新エネルギー)からのリスクについて意見交換。
- ⑤ 津波対策や放射線リスクについて国民への判りやすい説明が不足していることに照らした、リスクコミュニケーションの在り方について意見交換。

感想： 学生達はメディアによる原子力報道を冷静に受け止め、「原子力は危ない！」とのイメージ先行の報道に対して批判的である。福島事故の原因と対策についても技術論でしっかり理解しており、日頃の先生方のご指導と学生たちの認識力に感心した。

5. グループ討論結果の発表とシニアによる講評

5班に分かれてのグループ討論の後、各グループ代表による討論総括報告と一人一人の感想表明あった。この学生の発表に対して、シニアを代表して以下の講評があった。

<高橋シニアの講評>

本日は、昼食でせんべい汁を共にしたお蔭で実に打ち解けた雰囲気での対話会ができ大変良かった。学生の発表はいずれも具体的でしっかりしたものであり、一人一人の感想も立派でポイントをついていた。原子力に対する理解度も向上していると感じた。安全/安心は難しいテーマであるが、反対の論理や脱原発のリスクなど討論の切り口は素晴らしかった。まとめの発表は、これまでの授業の成果が発揮され、今後の打ち手についても言及されたのは感心した。本日の対話会を契機にしてエネルギー問題/原子力についての対話の輪を広げていただきたい。

<三谷シニアの講評>

本日は対話会全体の企画が素晴らしく配慮の行き届いた会であったことに感謝申し上げる。学生たちは良く話し、しっかり喋り内容もしっかりしており一人ひとりが凄かった。これも先生方の日頃のご指導の賜物と敬意を表したい。この様子で学生たちが社会へ巣立って行くことを願いたい。

なお、原子力は賛成 OR 反対の単なる2項対立だけではないので、不安に

思う人に対して正しい知識と事実を示していくのが肝要である。また、皆さんは真実と本質を見抜く力を涵養していく事が大切であり各自がより努力して行くことを期待しています。

6. シニアの感想（順不同）

<小川博巳>

零下の気温で手と頬が痺れつつも、身がしまる思いで対話会に参加した。ご指名の基調講演では、福島事故が余りにもネガティブな世論を形成しているので、敢えて女川の成功事例とを対比させ、新たな規制基準により安全対策が実施されている一端を示しつつ、再稼働へ向けて国民の理解と信頼回復の大切さを訴えた。日本が沈没しかねない現状を訴え、一方ではグローバルな動向を提示して学生の関心を誘い、将来展望への希望と意欲を持たせたいと念じた。

幸いにも学生達の敏感な反応と、積極的な発言には目を瞠るものがあった。八戸工大の日頃のご尽力と共に、学生に貴重な刺激を与え得た対話会は、大成功であった。

惜しむらくは対話会の締め括りの、学生との懇親の場が持てなかったことだ。また、翌日のY国会議員及びエネ庁K室長とのタイトな対談を控え、早朝出立だったことから、参加シニアの皆様との時間を超越した交流が持てなかったのも、残念であった。

<菊池新喜>

八戸工大は、小生の恩師が学長をしていた時期があり、度々訪れていたもので懐かしい思いで伺った。この学生との対話集会も2回目である。

話をスムーズにすすめるための方策として、大学では学食での昼食会を用意し、学生とシニアが会話しながら食事ができたので、和やかな状態で対話集会を始めることが出来た。

福島原発の事故を踏まえて、学生は原子力の必要性を国民に理解してもらうために「事故の可能性は零でない」、「事故のリスクが非常に高い」、「原子力は怖い」、「現状では原発ゼロでも社会は動いている」などの事項について、一般の人達にどのように説明し、安心してもらうべきかを考えており、これを基にして対話を進めた。結果として原発の安全対策を丁寧に説明し、国民の信頼を回復することが重要であるとの結論になった。

「グループ発表」は対話の内容をよく整理して報告しており、「個人ごとの感想」も各人夫々の考えを手際良くまとめていた。今回の対話全体の印象は、

学生諸君は原子力について相当の知識を持っており、それに基づいて積極的に発言していた。前回の集会では、学生に発言させるのに苦労したことを思い出し、大学側の対話集会への熱心な指導が実を結んだものと感謝の気持ちでいっぱいである。

<岸昭正>

今回9回目となった八戸工大でのシニアと学生の対話は、原子力産業が集中している青森県ということや学生の原子力産業への関心も深いという条件もあって特色ある対話活動が続けられてきた。振り返ってみると私も初めて学生との対話を体験したのがこの八戸工大だったと記憶している。この八戸工大で学生の原子力工学を指導しておられる阿部勝憲教授と学生時代同級だった気安さもあり、今回で4回目の参加となった。私に対話した第2グループの学生は電気工学専攻の3年生で、部活でも付き合っている仲よし同志の4人だったのでお互いには遠慮せずに話せる環境にあった。また大学はアイスブレイクの効果を考えて、学食で煎餅汁の昼食を学生とシニアの三谷さんと私も一緒に会話しながら食べる時間がとられていたので打ち解けた雰囲気でも会話が出来てよかった。

小川さんの基調講演も分かり易くて好評だった。基調講演の中でも脱原子力が抱える危険性も説得力ある形で示されていたので、対話の中でもさらに議論を重ね、原子力にある程度危なさを感じていた学生も原子力は必要だという気持ちになったようだ。

この学生たちは学科横断的な原子力工学コースを専攻して、放射線計測や県内の各原子力施設を見学する「原子力体感研修プログラム」に参加していたので原子力産業や放射線について基礎的な知識を身に付けていたので対話も脱原子力の問題点や再起動するのに何が重要かという肝心な点に議論が集中できた。

シニアの助言も影響していると思うが、学生たちは一般人が放射線やエネルギー問題についてもっと知識を持つことが基本的な重要問題であると感じてくれたようだ。これも実際は簡単ではなくて、日本原燃を就職先として希望している学生も家族に反対されたことを話していた。これもマスコミの原子力に対する評価が反原発的なものが殆どであることが原因のようで、そこでマスコミの問題についても話し合った。でも本人の意思は変わらず家族の説得に努めたという。

今回の対話を通じて、学生との対話が有効であることを改めて実感できた。

<工藤昭雄>

1. 3GR はバイオ環境工学科3年、女子学生3名、男子学生2名で、女子学生のほうが多い構成であった。
2. シニアはあまりしゃべり過ぎないようにと、学生（女子学生）に対話をリードしてもらう方式としたが、午前中の学生間の対話でシニアからみて極めて妥当なサマリーが出来上がっていた。
(原子力の必要性及び理由、再稼働の為には何が必要か？マスコミの果たすべき役割等) このためサマリーに至ったプロセスをなぞるような対話になってしまったが、昨年にくらべ学生たちの勉強が一層進んでいるように感じた。
3. 出来れば、原子力に反対のメンバーがいて、反対理由を色々あげてもらい、それについて議論が出来たらもっと良かったとも思うが、望み過ぎか？
4. もう一つ印象に残った自分達が勉強した成果、議論して得た確信を周囲の人に伝えて行こうという強い意欲が表明された事である。
5. 以上総体的に爽快感の残る対話会であった。

<栗野量一郎>

[全体に関して]

○グループ4の学生は6名であったが、内4名が佐々木姓である。大学から遠くない白銀（しろがね）地区に多いとのことで、3人がこの地区の学生であった。

このように、ほとんどの学生が八戸周辺の出身者であり、自宅から通えない学生は近辺に下宿しているとのことであった。以前はこの辺りは山で、住宅などあるわけがなかったが、八戸市の発展に伴い 私の住んでいた旧市街はすっかりさびれてしまったのに対し、新興市街・新興住宅街になっており、学生の受け入れも楽になった模様。こうした産業界関連の人々が多くいる中で生活していることは、学生に影響を与えているものと思う。

○私自身、昨年12月の東北大学に続き、2回目の対話参加である。しかし今回は前回の旧帝大大学院生との対話に勝るとも劣らないものであった。特にグループ5の発表者桜田君の発表は、講評にもあったように素晴らしいものであった。

○八戸周辺からだけの学生でもこれだけのことができるのは、前述のような

環境、さらに周辺に原子力関連施設が多く、この方面に就職する学生も多いことから、原子力に関する感受性が高いものと思われるが、やはり佐藤先生をはじめとする指導と、体系づけた教育（原子力体験学習）が功を奏しているものと思う。（全員がダークスーツであったが、通常の大学では素直にいうことは聞かないであろう、またこのような姿はこれまで見たこともない。八戸工大の先生方の指導の力を見せてもらった。）

余談であるが、八戸工大は上記の特性を活かし、「工学部」から「原子力工学部」とでも改称したら、面白い展開が図られるのではないかと思う。もちろんこれによって就職が難しくなるといことは八戸工大の場合は絶対ないとおもう。

〔グループ4に関して〕

○冒頭ファシリテータは学生側かシニア側かと問いかけたが、学生たちは慣れていないからということで、シニア側の西郷氏が対話を進行した。

西郷氏はさすがで、積極的に問いかけをしてうまく進行して頂いたが、グループ4の機械科の学生は、他のグループより原子力に関心が少ないようであった。直接の就職先ではないと考えているせいであろうか。

○最初から全員「原子力は必要」ということであったが、午前中の勉強による単純な考えと思われる。対話の中心は安全 特に放射線にかかわる質問がほとんどで、後半はメディアに関する話題となったが、西郷氏からの一方的な話となり、意見交換まではいかなかった。（対話の初めに、西郷氏からは、用語などわからないことがあったらすぐ質問するようにと話してあったが）

○このため、発表は午前中に学生同士で行ったディスカッションによるものがほとんどとなっていた。

しかしながら、私がこれまで接してきている国立大学の学生よりは良いと感じた。

〔その他〕

○小川氏の基調講演は、聞き手の気をそらさせない素晴らしいものでした。資料だけでなく、特に話の展開の仕方が、私にとって良い勉強となりました。

<高橋謙治>

この対話会の進め方として「せんべい汁の昼食会」を設け、食べるところから「対話会」が始まるのは、学生に「気軽に話せる対話会」をイメージさせる大変「ユニークなアイデア」と思った。

対話では、「安全と安心」のテーマは難しいと思われたが、学生たちいきなり「安全とは何か」「安心とは何か」を質問したが積極的に発言をしてくれた。「国民が安心を得られていない現状」を強調していた。

「国民の安心」を獲得するには、「国民の信頼」を得る必要があり、「国および専門家」の安全向上の努力と隠すことのないオープンな「繰返しの丁寧な説明」が必要であると結論づけていた。

学生たちの「グループの対話の概要発表」は良く整理しており自信を持って発表していた。また、「個人毎の感想発表」は各自ポイントを捉えており高く評価できた。

3年間の「原子力工学コース」の学習と見学研修が学生たちに「原子力の知識と自信」を作り上げていると感じた。

<西郷正雄>

この度の八戸工大での対話会への参加は、4,5年ぶりである。その間に先生方が、どのように教育されたのか、従来の学生は、こちらから質問しない限り黙りこんでいた。しかし、今回の学生たちは、活発に質問を自ら行うようになっていたので、驚くばかりであった。

対話についても、自分の考えをしっかりと述べられるので、話がとんとん拍子に弾み、分からないことについては、しっかりと教えられたのではないかと思う。

以前は、事故前の参加であったからかもしれないが、学生たちの原発についての関心度は、今回と全く違っていた。原発の必要性を6名全員が認めていたので少し気になったが、先生の平生の教えが、彼らにそのような考えを持たせるようになったのかも知れない。

そこで、原発を無くしたら何が困るのかを皆に問うたところ、一般的な、化石燃料の枯渇や地球温暖化の問題、自然エネルギーの不安定性、エネルギーの高騰の問題などを理解していた。ただ、詳細には掴んでいなかったので、原発についてのメリットとリスクについて、詳しく説明した。皆に納得してもらえたようなので、今回の対話会は、成功裡に進んだものと喜んでいる次第です。

今回の対話会では、午前中にグループ間でのディスカッションがなされ、その後のシニアとの昼食会ということから、午後からの対話会に入る前に、学

生間での新密度が増していたこと、シニアとも食事を挟んだ雑談が、対話をなごやかな雰囲気を作り出したのではないかと思います。更に、発表会では、各自に一言話させることをやらせるようにしていたので、学生は、和やかな雰囲気の中での緊張感が、今回のようなすばらしい対話会を実現させたようにも思います。

<坪谷隆夫>

1. 3班に配属された学生は、5名中3名が女子学生、いわゆる「リケジョ」である。バイオ環境工学は、化学系専攻で放射線にもなじみがある。グループ対話では女子が終始リードしていた。
2. 対話会は授業の一環とはいえ学生全員が男子はダークスーツにネクタイ、女子はダークのツーピースでシニアの方が緊張した。なるべくリラックスして対話を楽しむ雰囲気を作ることに専念した。
3. 風力等自然エネルギーについても問題点を含めて知識を持っている。原子力発電は必要だが徐々に減らしていくとの考えを全員で一致していたことは納得もでき驚きもあった。別の意見もあって良いように思った次第である。今後、政府が本気でエネルギー教育に乗り出すことを期待したい。
4. 原子力発電の信頼回復についても、防潮堤などハードの重要性を指摘するも、事故調などで指摘されているガバナンスなどソフト面の向上についての指摘は見られない。これも、事故調などの報告内容を学習する機会が少ないことが原因などであろう。
5. 八戸工大という地の利を生かした大間や六ヶ所の見学の機会が教育の中で与えられることを学生自らがすばらしいことであると受け止めている。4年間を通じた「原子力体感研修プログラム」が学生たちに支持されているようで誠に喜ばしい。
6. シニアとして佐藤先生をはじめ八戸工大の教育方針に心から拍手を送りたい。今後も、原子力施設の見学やこのたびの対話会などが引き続き計画されることが重要ではないかと思った次第である。

<三谷信次>

3年前から八戸工大での対話には参加させてもらっています。そのおかげで毎年学生達の対話能力のレベルが目に見えて向上しているのが分かります。毎年参加する学生が変わっているのにレベルが向上しているということは、佐藤学先生をはじめとする対話会に関係する大学の教授陣の改善努力の賜物ではないかと考えます。とにかく学生の話す態度が自信に満ち満ちているように感じます。特に3年生を対象にされているが、この対話会が就活前後の時

期に行なわれているのは大変効果的ではないかと思います。対話の内容も、以前は技術的なテーマが多く知識の提供、吸収型のものが多かったのが、今年は今グループ同一で、しかもテーマが技術供与型ではなく誰でも議論に参加できる原発の今日的な話題を持ってきたのはとても良かったと思います。先生方が毎年研究されてきておられるのが手に取るように分かります。昼食の懇談もグループごとに割り当てて、せんべい汁を頂く段階で対話に入っているのは、時間の節約にもなり親密さを増し、和やかな気分で対話に入れる点は素晴らしいアイデアだと思います。もし来年参加できるチャンスにめぐり合えるならば、次はどんな工夫がなされているか今から楽しみにしています。マネジされた先生方や参加された学生諸君に心から感謝申し上げます。

<針山日出夫>

今回も、対話会は周到に準備され、かつきめ細かく気配りいただいたおかげで充実した対話会が出来ました。特に学生との昼食のアレンジがよく、以降の対話を円滑にしてくれました。

グループ討論に於いては、学生達は大変率直に日頃の問題意識や疑問点を語ってくれ、シニアにとっても充実した、達成感溢れる対話会であったと感謝しております。

また、グループ討論の発表のスタイルや発表における問題点／論点整理は大変しっかりしており、どの発表も堂々とした立派なものであったと思います。これも先生方の日頃のご指導の賜物と敬意を表したく存じます。

その上、学生達はちょっとした挨拶や相手に対する対応の際の言葉つかいなどの躰などが行き届いており、社会に出ても立派に伍していける人間を育てられているとの印象を受けました。対話していて大変気持ちのいい学生達で、感心いたしました。

私たちは SNW は、原子力の押し売りが目的ではなく、我が国が深い見識と理性で導かれる一流の国であってほしいと願い、その先兵を若い学生達が担って呉れることを期待して学生と篤く対話をしており、その行動規範からも満足のいく素晴らしい会でした。

以上